

## 授業方法について独自に工夫していること 【創造科学系】

板書を極力避け、パワーポイントを利用し授業を進めた。  
受講者とのコミュニケーションを重視し、適宜発問した。  
原理の理解に役立つために、簡単な教具を用いた説明に努めた。  
グループ活動の時間を設けて学び合うことで理解しやすいように努めた。

グループによる作業等の時間を設けて学び合わせて理解しやすいように努めた。  
パワーポイントを利用し授業を進めた。  
受講者とのコミュニケーションを重視し、適宜発問した。

普段デザインに対して漠然としたイメージしか持っていない学生が、デザインに対して興味を抱けるような身近なテーマと、挑戦したくなるような課題設定をしている。

「日本・中国の絵画と理論」をテーマに、前近代の中国と日本の絵画と各時代に著された画論を対照させて、現代とは異なる多様な絵画観の下に制作され、鑑賞されてきたことが理解できることを目指して講義した。そのために、パワーポイントで各時代の絵画作品を紹介するとともに画論の読み下しや現代語訳をプリントにして配布した。画論のプリントは使用する前の週に配布して予習を促した。また、授業を集中して聞き内容を理解するよう、毎時間の終わりに講義内容をまとめ疑問点を質問する小レポートを課し、質問事項は次の時間に回答した。

本授業は、ものづくりに関する内容を扱う授業でした。受講生の多くが、これまで受けてきた図画工作科や美術科の授業の中で作品を制作する際に、非常に悩んだり大変苦しんだりした経験が少ないと考えました。そこで本授業では、作品を作る中で、失敗を数多く経験したり試行錯誤を繰り返したりしなければならぬ状況を作るとともに、非常に悩んだり大変苦しんだりした末に作品がやっと完成するという過程を盛り込みました。本授業では、この点が重要であると考えました。学生たちは、「この授業では作品を作るのにとっても悩んで難しかったけれど、苦しんで作った分、作品が完成してとても嬉しかった。」「最初に思ってもみななかった作品を作ることができた。」との言葉や反応がありました。この点で、ものづくりに関する達成感や満足度が高かったのではないかと思います。またできるだけ一人ひとりと会話をするように心掛けました。

できるだけ、グループ内で相談する時間を作るように心がけました。

毎回、授業内容に関連したテーマを提示し、受講者に考えさせている。

学生の性格、技術や体力レベルに合ったスポーツ実技を実施するために、私自身が積極的に参加し、対戦を通じて学生1人1人とコミュニケーションが取れるよう心がけている。授業の流れとしては、テニス、卓球とともに授業の1/3の時間をラリーなどの技術練習に、残りの時間をゲーム中心の実践練習を行った。学生自身の技術レベルが上がれば上がるほど、競技の面白さ、難しさが体験できるよう意識している。

最終的な決定は教員が行うものの、学生たちの意見をなるべく取り入れ自分たちも授業運営に関わっているという意識を持たせるようにした。

学生達が主体的に選択、判断、行動できるよう、すべてを説明するのではなく、必要最低限の説明にとどめるよう心掛けた。学生を見守り、各個人の創意工夫、学生間のコミュニケーションによって、解決できそうにない様子であれば補足説明等を適宜行うようにした。

「ジェンダー」を切り口にして、多様性を尊重した共生のあり方について考えることをねらいにした授業である。基本的概念や論点を理解しつつ、学生自身が多様な意見、考え方に会うことで、テーマに関する自分なりの見解を持つことを重視している。今期の授業では、学生同士の意見交換の時間を増やし、LGBTの支援団体のゲスト講義を取り入れ、学生が人と出会いながら考える方法の工夫を行った。

7人の教員によるオムニバス形式の授業である。オムニバスは往々にして「ばらばら」になりがちであるが、それを回避するために、年に一度ミーティングをもち、メールでも意見交換をしながら授業を組み立てている。